繪本通俗三國志 七編 八

へ 21
221
68

東京學藝大學

教育

繪本通俗三國志七篇卷之八

目錄

孫峻計殺諸葛恪
姜維計困司馬昭
司馬師廢魏主曹芳

孫峻計殺諸葛恪

呉の勢大ゐに打勝ち。魏の勢尽く敗走ーけるゆゑ諸葛恪勝軍の賀をもよほし諸将を集てやけるゐ司馬昭軍破れさく都へ上り。魏を滅おーさく。天下一統の大業を成んとて蜀乃國へ使をたせさく。姜維ゐよの由を報ず。呉の勢二十万を與ーて。打立ける。忽ち一道の白気地より起りて。行前をさへぎる。咫尺の内も見分がたくりしゆゑ諸葛恪大ゐにおどろひて。馬より倒ゐ落たりけゐ諸人ーさとけ起ーけるゆゑ諸葛恪。夫

蔣延が曰く。その気を白き虹ありて。軍を於て不吉ある兆ありと。太傅ちゃく回りの足。魏いまだ伐べからざる諸葛格いうのみて曰く。汝いろんで浩いまだしき事をやく。味方の気を先くじむるとて。引出して斬んとしけれバ諸将哀んで命をこわれまうさく其命をたすけ官を剥で百姓とし。魏の國を打向ふとも。丁奉やける。魏を新城を破りて。第一の和とし。尽くその陥口を守る。〳〵新城を破らバ司馬師ちからバ。驕を冷さん諸葛格尤と同じ。直ぐ新城へよせ四方を囲んで。日夜を分ず攻戦。城の大将。魏の張特といふをのこ。よく守りて拒ぎ戦ふのとき。呉の國へ大勢を

さし向なバ。今いやうく勝軍の注進あらんと待ある大都督司馬昭東呉の一戦を打負さ。尽く逃上るとも沙汰ありけるバ司馬師大きどろくある追〳〵急を告さ。呉の勢二十万已を新城を囲んで城をとでを落んとせと報じけるバ司馬師あハざ後悔。是他人の罪をあらバ我自らあせる過ちとて。如何せんと銭をるを主簿虞松が曰いや謀葛格志をりを新城て攻るとも此城要害よけれバ容易よい落べからず。呉の勢遠路を来りて入へ多く兵粮へ寡し。彼ら兵粮尽るあべきとやぐらをを只母丘儉を命じて攻るともあんて坐をを。門篭く

諸葛恪

諸葛恪 椀水を侍嬶に噴て嬶を斬る

侍嬶

心急り。兵粮ゝ詰りて乱ㇾん。そのとたんをもって。
虚ゝ乗て伐程あらバ。十分の利を得べし。此のごとくゝ住さ
ゝバ。呉の敵ゝ怕るゝ足ゝ。推量さるゝ蜀の勢ゝの虚ゝ
乗て攻来らん是を専用心ーるゝ人といひけるに司馬
師げゝもと同じく。又弟の司馬昭と長安へ下ーて郭淮
と共ゝ蜀の姜維を拒がせ。安仁俊胡遵ゝ命じて呉の勢を
拒がゝむ諸葛恪ゝ數月新城を攻るども墓ゝーさとも
あらりけれバ自ら怠きる大将を詈ーて。諸人を激し力
と尽ーて攻けるに。城の東北の角をバ念ちく攻破りぬ城
の大将張特いそぎ使を出ーて和睦をこひけるに諸葛恪
曰く。早ゝ降らざんバ忽ち城を踏破り。一人も残
ず斬殺さん。使告て曰く。魏の國ゝ法度まことゝ重く敵
ゝ城を攻るゝ百日が間堅守るども救の勢きたらざると
ゝバ城を開き敵ゝ降る此のごとくあるとゝバ妻子眷属も
罪を免る甚ゝの城を守りて已ゝ九十日ゝあまりぬ願
ハ。数日の間御待ゐへ。若百日の限て満べ軍民尽く生く
降るべし。諸葛恪実ちりとおもひ暫く四ヶの味方を
収やさく攻ざりけるに張特緩兵の計を用ひて此日
間ゝ城の破れ入るを補ひ用意一ゝ備りくらべ自ら
矢倉ゝ上りて大音あげ我城中ゝハ猶半年の兵粮あ
り。爭ゝ呉の太ゝ降るべきとよばゝる。諸葛恪大ゝ怒り自ら
刀を提げく。士卒を激しー。一斉ゝ攻けるに城の上より射下

を矢ぬ。諸葛恪額を射られて。馬より落。諸軍ときひ回りて。痲を治せる。痛もあへず。起上らざりけるこそ。士卒気を屈して。戦心なく。殊に炎天の暑気たへがたきよ。汚水を飲で。病伏せるもの多かりけり。日を経て諸葛恪が矢瘡やうやく痊けるこそ自ら出て城を攻んとするよ。諸人告て曰く。士卒とぐく病伏て。安んぞ戦ふべからず。且つ士卒の怨り。再び病のことをいよ〳〵落去もの多しと。況や都督の教を去らば。右てい叶まじと。退いて國へ回らんとするこそ。諸葛恪軍果して病伏黄ばみ浮て腫よけるこそ。諸卒怨て倉ん。拔がけよと告けるこそ。諸葛恪おどろひ蔡林一軍を引く。魏へ降るこそ。自陣中をおろし去る。諸軍思ひ〳〵に打回りけり。諸葛恪へ詮なき師を出しとくさんぐよ打あされん。の内深く羞さ。金瘡よ事をよせ。私の家へ在てあて朝へ出ざりけるこそ。呉主孫亮みがらら行さ病を問文武の百官尽く来謁を諸葛恪。人の誹論を怕ると。て手下の大将よ過ていひるは。或ひ首を刎又ひ遠く流罪せしむるもの多かりければ。内外みな怕おのくそのち已が親き。朱恩張約といふもの二人よ御林の軍馬をとべ摂らせけるこそ孫峻字ひ子遠とらよものあり是へ孫堅が弟の孫静が曽孫みさ。孫恭が子ぢり。今まで御林

の軍を攝さく重く孫權を用ひらるゝが俄に諸葛恪が計ひとして朱恩張約さることを領しけるに皆ん内に怒を含こと太常卿滕胤きたりけるに迎入るゝく國の政を談ずるに滕胤ヤけるゝ諸葛恪みづから權を專らにして罪あきを公卿を害し不仁の心いよく長ぜ何ぞ早く計を運らざるべからず孫峻が曰く我もその事を思ふり唱やとものゝ天子を奏せんとさゝ二人打連ゐ呉主孫亮みうへさく右の由を訴へけるに孫亮が曰く朕常に諸葛恪を怕る如何もして除んとおもへども其便をはだ卿等忠義の志あらば密に計をなして是を誅せよ滕胤が曰く彼が金瘡たり陛下酒宴を設て招き多壁の間に武士を隱し置て捉ると合図に打て出て席上

みて殺さべし孫亮その義に從ひ孫峻に命じて用意をあさしむ去程に諸葛恪は淮南より回りて後心神恍惚としてあらざるべ中堂に坐したるに何とも無麻の衣を被く孝を掛たるその二人出来りて諸葛恪あやしんで何ものぞいまゝき体みく此みきたるを叱けれべその人大におどろき茫然としてあきれとる体たり諸葛恪いさみ是は故あらんとて士卒を召く拷問せしむるにその今げさくやけるに甘が父近比亡びたり是故に僧を請じく作善追薦の營をあさん為に此和尚を安の外に太傅の府中にありと云けるべ諸葛恪りの外に怪しき人や入たると問に皆

荅て某ホ一剣も離まじ。牧十人戈を持鎗を扒く。門を守
とのごとも曽く左様の人をとゞめけるとぞ。諸葛格孫あ
や〳〵番衆を一人も残さず斬殺ーその夜心易らぐ〳〵て眠
なりー〳〵俄ニ正堂の内。おびたゞしく鳴響て。百千の霹靂のお
のるがごとくありけるゆゑ自ら行く。正堂の梁
中より折さく二ツとちぎり。陰風習ことして何ともなく哀を
哭く音耳ニ満さ。今朝殺ーたる麻の衣を被たる者牧十
人の軍士を伴ひ来り。諸葛格が頭を掴んで命を求む諸葛
格覚て喪ひく。地の上ニ倒ニけるが良久ーく甦り早天よ
起さ。湯洗ひ口漱ぎけるニ其水もあべこ血腥りけるゆゑ侍
婢を叱ひて水をとりへさせけるニ幾度うめれども。その臭きを旧

のごとく諸葛格ゑあらごと怒り。立所ニ侍婢を斬さ。又衣服さき
更んとするにそれべ是も血腥ーく牧十度被更ども臭を休
ざるの内洞悵としてゐたるある忽ち天子勅使あり。太
傅を招いさ。酒宴をあーるのうち早こニ黍らるゞーと云けれ
べ諸葛格勃て美り。急ぎ車ニのりて多の兵てさゞ中門
まで出けるべ日比難ひ置たる黄ろる犬あり走り来て諸
葛格が裾を呀へ。その声嬰くとしてーさ哭く状をあーければ諸
葛格が曰く山犬ぞ参内てとぶむるあらんとさ。遂ニ引回そ
坐ーけるが暫くありて出けるべ犬又走り来さ引止む是の
ごくあること三度ニおよびけるべ扨いその犬ぞまと戯るゝく
とて。兵ニ命じさ逐打せ車を推さ出けるべ俄ニ白き虹。地

崩雪
諸葛恪妻

諸葛恪ガ妻閨中ヨリ奇怪ヲ見ル
侍嬶妖怪

より起く練絹を打ぶとく。天へ上り失けり。諸葛恪左右の人にむかつて。此ら不吉の兆ありやと問けるに皆答ていれ慶の吉兆ちうとやをや。己ら車とゝやそ禁門へ入けれべ。武衛將軍孫峻出迎へ地へ拝しくやけるへ太傅の尊体近比不安ちうときゝのびて。天子酒宴と設けて侍のみと云けれで互に礼了て内へ入けるに御林の大將張約車の前へ来て。今日宮中の酒宴へ某さらんほどそ急ぎ車を回しけるへ太常卿諸葛恪大にあや申んで急ぎ車を回しける。勝愈と来り車の前へ拝伏しく曰く。されい何として御回ぞ。そもくへ入りて天子へ見へんへ諸葛恪が曰く。我俄へ腹痛をおぼえ志ゝくへ天子へ見へんことをはべ勝愈が曰く太傅さらば

魏を攻のびて後卒へ天子へ見へんへ今日酒宴と設けて。國の大事と談しのみ假令いろある事ありとも是よさく来り回りのみてとやある。勉く天子へ見へ入けるべ。呉主孫亮出迎て曰く。朕久しく太傅へ逢を今日酒宴と設けて一大事と談せんとありを。諸葛恪が曰くいろある大事よくいぞ孫亮が曰く。志ばらく坐せよ國家の政を談せんとて孫峻へ命じて盃をとらせけるに諸葛恪へ内安らばず臣が病いまだ痊ざ是故へ酒を呑ざるべと云けるに孫峻が曰く大傅へ常へ薬酒を製しく。飲のみと兼ねる急ぎ人と弛て取来らしめん諸葛恪が曰く我病薬酒へ苦しらば

孫峻をあなち人を遣しく。諸葛恪が。みげうち造置たる。
藥酒をとりよせけるに。諸葛恪もんを安んじく。是をの
を已ゐ數返ゐよびけるとも。孫亮事ゐ託く外ゐ出ます
れば孫峻殿の上より走り下り衣裳を脫ぐ。小具足ばら
りゐあり。刀を提げく。おどり出天子詔あり逆賊を誅を
とよびりけるに。諸葛恪大ゐとろき盃を棄く劒を拔
と允首ゐ已ゐ地ゐ落たり。張約ゐるとんく。刀を舞て
討く蒐り孫峻と戰く。張約右の臂を斬落され。孫峻を
左の指を斬るとみけむ。と允ゐ武士ども走り來り。張約を
寸〳〵ゐ斬く肉泥とーければ。朱思ゐあへーとや思ひけん外
ゐ走りけるを。追付く斬殺と。孫峻をあなち大音あげ諸

葛恪罪ありく。已ゐ誅ーてよびり諸人罪ものとよびり
べ上下ゐお安堵てあれ。其後殿上の血をきよめ再び吳主
孫亮を請じく。慶の酒宴をもーよの帶とめて諸葛
恪が屍を包ゐ簀をもの。て上て東祿車ゐのせく城南の門外
石子崗の塚坑ゐぞ棄させける。諸葛恪が妻ゐ房の內ゐ居
りけるゐ俄ゐ人の愕くやうすーく。恍惚とーけるが暫あ
りく。侍婢一人外より來り。遍身血ゐ汚をたりけるべ。
あきれんで何事ぞと問ゐその女目を怒ーし牙を咬高踊
挙そその頭梁を撞るとこ乃ち諸葛恪ちう今日奸賊
孫峻ゐ出殺をく。殺されとりとよびりーうべ一家の老少ゐ
どろき怕るこく。哭き号ぶ四方ざきのよ不時ゐ武士どもを

せ来り。其一家を去りて尽く市を斬る。とれを呉の大兵二年冬十月ちり。初め江南の小児の謡を諸葛恪将芦蓆單衣筇鈎落。于河相救成。子閣とのみ聞て諸葛恪ダとあんぐ聡明みーて才智尽く外へ著るを嘆き。此子家を保の主とあらざるといひーぐ果ーて此のごく又魏の光禄太夫張緝ガ司馬師を語ぐやけるへ諸葛恪ハ久ーらざるべし必ず死せん司馬師その故を問ふ感震其主功蓋一國ちんぞすくべらず呉主孫亮ぉ召ぜり呉主孫亮ぉ召ぜり。孫峻て亜相大将軍富春侯ろ封ぢて内外の事を統督せけるこぐ権柄又一人を属ーける。

姜維討困司馬昭一

蜀の延熙十六年の秋。衛将軍姜維成都よりて。呉の諸葛恪ダ訃音をきく天子の詔を受さ。又二十万の勢をもて。廖化張翼を先手とし。夏侯覇を参謀とし。張嶷を運糧使とし。陽平関より出さく。魏を伐んとて復侯覇と談ーくやけるさ。雍州を攻さく勝ぢーく空くうる。今ー再び出べ又敵の備あらん先何より攻べきぞ夏侯覇ダ曰く。隴上の諸郡。こそ南安郡のごく兵粮多ーく若是所とをとりさく根本とせべ敵を討ふ便をぼん先ふ打負て回しい羌の勢力のおそまさふ。先使てせさ。羌の勢を隴右みさく待合せ。そのち兵を進やそ。石営より出さく董亭をすぎ。南安郡を攻取べーと姜維允と同じ此計をあぐ妙ろうと

て郤正を使とし。金銀蜀錦を西羌の胡王に贈り。好を結んで援の勢を脩右より生さしむ羌の王迷當その礼物を受昭烈皇帝の恩を忘さひ孔明が徳を憶さ。五万の兵と共に。俄何燒戈といふものを大将として南安より生て。姜維を援けしむ魏の左将軍郭淮。その由を告けるべ司馬師大さおどろた。馬をとばし。洛陽へ急を弟の司馬昭へ淮南の軍より報む。昭へ淮南の軍より報む。雍涼将軍徐質さを生さ。白く禍ざわくへ行て蜀の敵を破らん司馬師もとより其英雄を知けるべ然ろべし。乃ち先陣の大将として司馬昭を大都督とし。行さ。郭淮を扶けしむ去程より姜維兵と進て董亭をとりけるべ魏の勢。哄を造さ路をよぎろう。徐質大ちる斧を打振り。切れ入れる馬を生さ。蜀の陣より。大将廖化討さく生て。戦ひ二三合ありて叶ざるとして敗走之と次ぎ張翼入替さく戦ひ。これも叶ざるとして引退けべ。魏の勢勝う乗て大よ進む。蜀の勢まくられ。三十里退れべ姜維手合の軍よりは。夏侯覇を召て問て曰く。徐質ハいかる者ぞ。夏侯覇が曰く。司馬昭が手下の一勇夫なり。姜維が曰く。御辺いかる計を用さ擒させん。夏侯覇が曰く。明日兵を生して。暫く戦ひ詐りさく引退べ敵うるならば追来らんそのとき伏勢をもつて生取べし。姜維が曰く。司馬昭が仲達が子なり。豈兵法を去らざらんや。若地理の疑ひきを見べ。多ならば追さく来るまじ。魏の勢。

ず兵粮の道を塞ぐ。今却て是計をもつて徐質とうと
んとす。急ぎ廖化を呼ぐ計を授け張翼を兵をあたへて
谷の間を伏置姜維夏侯覇をひく陣屋を守りて路を
鉄蒺藜を布散し。柵逆茂木を堅固に結ぐべし。駐るの
体をあらく徐質へ毎日おくりよせ戦ひを催せども蜀の勢一人
も出ざるけるべ甚あやしむ。弁候より告さきけるの蜀
の勢へ鉄竜山の後を出ぐ。木牛流馬を弛ぐおろく兵粮をそ
おぶ是久しく留るの計ぁぐ差の勢を待るものあらん司馬
昭おとときいて。徐質をよび我さを蜀の勢て破りくへ彼ぐ兵
粮の道を塞ぐ故ぢう。今蜀の勢。鉄竜山の後へ兵粮をそおぶ
汝今夜五千余騎をひき。難所を陣をとり。運送の路を塞が

べ敵自然と退らんと云ふとべ徐質計を受てその夜の初更を鉄
籠山の後へ出りるを案のごく木牛流馬百足あまりを米俵負せて通
りれべ喊をどりと造りて蜀の勢成八方へうけちら！兵を二手を
分て一手ハ兵粮を本陣へもおさせ一手ハ自ら従へて追打ち十里べ
かり進むるあり。行前を又車双双ぐ路を遮りるとべ兵粮馬よ
り下りてさいを開んとするを忽然として両方より火を出なり
徐質大きおどろき急ぎおりぞろんともれを儘ちる小路を柴
を積で。火を付たりしかへ焔天をこがして通るべきやうぞ
なきと知を合図の鉄砲ひびきく二手の勢討ぐ出ひだりを
廉化こぎを張翼引色んで攻るとべ魏の勢或ハ討ち或ハ焼たをを
て逃るもの一人もなし。徐質ハ只一騎囲を出つるを果て走りる

姜維徐質と一鎗ゝ刺ず

徐質

姜維

ゞ又向より姜維一軍を引て来りくべ。謄をひやして山へ
逃のぼる。姜維ゐ汐ゝけて一簸ゐ夾おろゝ。初ゐ徐質ゞ兵粮
を運せたる一手の勢も半途よて一人を残らび復侯覇ゐ生
どらる。復侯覇その甲盛ゐ御方の勢ゐきうべさせ魏乃方
の旗幟をさゝせて小路より司馬昭ゞ本陣ゐむゝ番のとの
どもゐゐを乙て徐質ゞ回りたるとて急ゐ門をひらきけ
きび蜀の勢ゐとぐくくれせ入り同音ゐ喊をどゞと造て四方
八面を斬てまわる。司馬昭ゐ如何ゐとおどろき。馬ゐ物の具よ
とひゝめく。ゐゝ蜀の大将廖化一軍を引て前より蒐る司馬昭
後より逃んとをれび姜維大軍を引て殺到ゐと魏の陣中
上を下へと騒動して死をものらぎ汐らび司馬昭

四方ゐ路おきをゝく打残さる兵を従へ鉄笕山へ逃上る。
ゐの山元来四方みお険阻ゐくわびる細き一ゐの路あり。其
上ゐ湧出る泉ありて只百人むるりい飲足べし此とゝ司馬
昭ゞ手下ゐお汐残る勢六千余騎あり。姜維ゐ西方を開
れく外ゐ飲べき水おけるべ人馬みお枯渇しく止るべき様
ぞありける司馬昭天を仰ひで長嘆しゐゝ二ゐの死を
べしと云けるべ主簿王韜ゞ曰く。昔し取恭といひし人軍中
ゐ水ゑしらくべ井を拝しくべ泉をほりとり。将軍ゐゐゐお
らんくべ。何ぞ天ゐ祈ゐゐゐこゞひべ泉の湧
ゐ来て再拝し。今昭天子の詔を受おゝゐ来く。蜀の冠を破ら
んとをるゐ不幸ゐしく奸計ゐ中り退ゐく此山ゐ登る不

ゝ相従ふの六千余人山上水乏しく枯渇を恐ぶて能ゞ
ゝ某が運ゝのつゝ尽べ泉をほく枯尽さゝやゝ自ら頸を
刎く亡ぶべし。壽祿ありくゝ泉を賜く。諸
軍の命を助ゝと。誠を尽しく祈けゝべ司馬氏の運や強ゝ
りけん其泉忽ちゝ湧さくゝ汲ども尽るしとるしゝ姜維が山乃
麓を十重廿重ゝとり囲ゝそのゝ乃をのを呼ぐゝ山上の将内を
問ゝ答てゆけるゝ此山の上ゝ斯ゝる泉ありて百余人のゝ
足べし。若汲ゝと多きとゝゝ漏てとゝと語りけゝべ姜維大ゝ
喜び昔し孔明つゝ司馬懿を擒ゝせざるてを怨ゝより我
いゝ司馬昭を擒ゝんとて慶しけれとで勇け乃此と紀魏の
左将軍郭淮が南安郡ゝ居たりしゞ司馬昭が鉄篭山ゝ取
ゝやられる由を傳きゝ急ぎ兵を引ゝく救いんともるゝ副将
陳泰ゆけるゝ姜維をでゝ姜の勢を催しゝく先南安の城をせ
め取しめんとゝ若ゝをゝてゝ止のつゝ姜の勢虚ゝの乃て後を
攻んゝ不如いかゞゝて羌の陣ゝ降参しゝく中ゝく計を行ひ先
ゝゝて破ゝ後ゝ鉄篭山を救ひいん郭淮ゝゝ従ひ陳泰う
五千余騎を授けゝ。計を行いむ其夜陳泰羌の陣ゝ行ら
ゝしゝ哭ひて。地の上ゝ再拝しゝ郭淮みづゝゝ自ら奢をゝして。
常ゝ某を殺さんとゝ謀る此ゆゝゝ来乃て降んとを望むゆゞべ
くいゝ共ゝ漢と助け忠心を尽さんとゝ真しやゝゝ云けゝべ羌の王
迷當ゞ曰く。汝もし実ゝ降らべ如何ゝる功をゝしてゝ忠を致べ
き陳泰ゞ曰く郭淮ゞ陣の虚実某よく詳ゝゝゝゝ。今夜ゆゞべ

くに二軍を引く某よづひそ魏の陣へ入り内より攻て門を
関うん大王そのとき外より攻のぐ一鼓して破つ
べし迷當大いに喜び大将俄何焼戈へ命じ陳泰と案内者と
てむらがり俄何焼戈降泰の勢を後陣へ置羌の勢を陳
泰へ付く先手となる其夜の二更へ魏の陣へおゐよせる
その門へおゐ打開けさせ陳泰ひとり一騎せへ入ることを
て俄何焼戈鎗を提げさく続さく入らんとするを忽然と
て天地も山崩るごとく人馬陥穴の中へ落入く上を下へと
春蝕くわゝ陳泰が勢後より攻るより郭淮内より殺到ル
羌の勢死するもの数万人俄何焼戈
みづから頸を刎く陥穴の中へ死けるゆへ郭淮陳泰兵を

駆さく。ときに間もなく羌の陣へおゐよせ吹の壱をあぐるかねと
おそれあれ真地暗へ蔓なくわけるゆへ陣中おゐて騒ぐ一支も
支さこ迷當大王馬と打さらんとおゐ走けあつ。卒へ魏の伏勢へ生
どらるゝ郭淮大王へとらえさいてぎ馬より乗下さ自その縄
をとり魏の天子へとよまつり。御辺の忠義を志りまつる。今あ
よして蜀へ従ひまつると云けるゆへ迷當深く羞て罪て謝
た。郭淮本陣へ回さ。あらく持つ羌の勢へ思賞をた
どおくく。討とたるものを塗りけるゆへ喜ぶべとらへ者あ
り。郭淮大いに迷當へむらがりてやけるゆへ御辺初ぐかく先手と
ありて。鉄篦山の囲を破のゆへ我天子へ奏しく重く賞せん。
迷當頓首ありと領美しけれゆへ郭淮喜ぶた人ぶ羌の勢

て先手とし〳〵く小く魏の勢てすで
更ゐ鉄篭山ゐ近付き〳〵使てり〳〵
けるこべ姜維ゐ言りとゝゐらび復侯覇と共ゐ生むゐ迷當ゐ
〳〵百騎をりてまゐ内ゐ入り〳〵姜維ゐ對〳〵むりゐ
の勢後より吠て造りく一斉ゐ乱ゐ入けるこべ姜維おゝいろ
ゐ〳〵おごろき馬ゐ打乗く走らんとするゐ蜀の勢四方
より討てかけるこべ蜀の軍勢おびたゞしく討ゐく四約五落
ちく〳〵の敗走せり姜維い俄の事ゐく武具てとるべき暇
もなく漸馬のりく走出腰ゐうて付たり〳〵走るとた
矢い尽く落失たり只一騎西てのだんで独行するゐ郭淮兵と
〳〵さゝゐるこてゐ追てとゞめおべど急ちりて已ゐ交近くちりて鐙て

拾りく奸賊何まで逃るとよべくけるこべ姜維回さんとそ
るゐ武具て持徐べ矢もおきうて避。卒ゐ矢の来らざるを
けるこべ郭淮。四五度が程い身てくゝ引く兵と射るゐ姜維弦音
ゝくさきいく身て避ての矢て中ゐさく奪ひとり。我ゐ扶さん
で走けるこべ郭淮大ゐ怒心て鐙てはしのべ突んとするゐて。
姜維ゐ回〳〵く丁ど射るそのて郭淮が胃闇の真中てを
射とをし。馬ようど〳〵と落たりし〳〵べ姜維。首を取んと
るゐ魏の大勢命てとて拒ぎけるこべ手と下そゐおよだび
郭淮が鐙て奪く回りけり。魏の勢いそぎ郭淮を助く本
陣ゐ回り。鏃て掘く薬て傳たるどゝも。深手ゐるこべ血流ゐ

姜維郭淮が矢を中よつろみ其矢にて郭淮を射

て休を。忽ち亡びけるに司馬昭ハ鉄篭山を下さく。急ぎ敵を追けるが半途より引回をして。路を住るとも叶なとゝさく。されども徐質を討取郭淮を射死しくれんぞ敵の勢を挫ぎけるこゝにて功をのみて賊軍の罪を補ふよ。

司馬師廃魏主曹芳

司馬昭をでゝ洛陽へ回りさく。兄司馬師と朝廷の上へ縦横に逆威をの主を畏るゝ山よりて。魏の旧臣尽く服して。魏主曹芳も薄氷を踏がごとく針をのみて背を刺心地しけり。あるとき司馬師剣を帯て殿へ昇けるに曹芳急ぎ起てそゝくさをむかへ司馬師笑てやけるゝ争う君とゝして臣を迎る礼あらん陛下おごやかに坐しの臣みづから政を聞んとて。群臣とあひて國の政を決断しそめち昂然として座を起車ろのぼりしく回りしくべ魏主曹芳も宮中へ入けるゝ相従ものとてゝ中書令李豊太常卿夏侯玄光禄太夫張緝三人ありて。張緝ハ。張皇后が父にて曹芳が舅あるにしくべ共に深宮へ入りて曹芳。涙をあがしてやけるゝ先帝なきごと崩ドのみぎりに政を専にして朕を視ること仇のごとくありゝ司馬師兄弟みづから此人に奪るゝーとく涙泉のごとくあり。を社稷ろあらば此人に奪るゝーろゝ李豊が曰く小しも御心を苦めるゝ臣不才ありと

ヤせごとも頗る天下の名を負ふ。四方の兵、とあひや是國賊と誅とゞー。夏侯玄が曰く。臣が一族夏侯覇が蜀より降ーも実へ司馬師。兄弟が害せんとするを怕ぢ。大の賊めし滅びあべるあらば味方を回り来らん。臣へ元國家の旧戚へ何ぞんで坐らこえるまゝのびん曹芳が曰く只おそらくへ卿ホが事てあゞて能ざらんるやと。李豊ホ淚て流しく曰く。祢がかく三族をとて事をあさん曹芳ととあらち御衣の袖を扶く。指を破りて血詔を寫しー張緝ま投けてヤけるへ朕が父祖武皇帝て輩義が討んとせーも此のごー卿ホをお忠義の臣うあらば外ニ泄をとあれ李豊が曰く陛下あゝとて。詔る不吉の例を宣で。臣ホもとより輩義が輩ま

あらば司馬師爭う武皇帝と同らん御心て安んじ下ま之とく。三人去りそひく東華門ま出け玉へ司馬師劍をとりて相従兵四五百人てとゞく武具を持くたせ来るを。三人のものども震ひ怕ま。路の傍ま立けまべ司馬師問て曰く。汝三人あゝとくおそく退きた系李豊が曰く天子内庭まて書を観のー我ホ三人侍講ま召またり。司馬師が曰く。如何ある書をう読たる。李豊が曰く。復周三代の書をう。司馬師が曰く。天子書て観ー何事をう論じゆんー。李豊が曰く。天子の問のー我へ伊尹湯て扶け。周公政を摂るのまう我ホま主ま若ま。今の司馬大將軍公すあゐち伊尹。周公ありと奏せり。司馬師あぎ笑ひて曰く汝ホまと伊尹。周公ま比をと。

ど。本心ハ我レ王莽董卓とそゝべーニ人をお曰く。我ホヘ乃ち將軍の門下ニ屬をるものゝ。名ニ爭さ為るの如ニ司馬師大ニ怒り。汝ホ口のきゝたるやさゝ我ニ諫らくさをた宮中ニて哭へ何事ぞと責けるニ李豊ホヲお曰くさようのてと更ニ知ざるあらず誤りて疑ひの心司馬師ニ告て眼の中お我ニ知あり。何とさゝ事已ニ洩ぬりとおゝひ大ニ音あげさくやける。我ホヲ哭きーへ汝ヲ天子を蔑ニーさ。百官を芥のごとくさをるの今ニ司馬師いよ〳〵怒り武士ニ命じ〳〵生捉んと志けるを夏侯玄拳て握りさ。司馬師ヲ頭を打んとをるニ一人の大將鉄の鎚て投付。夏侯玄て真倒ニ打仆を武士ども。やゞて三人のゝを縛りさ。遍く壊て捜ーけるニ張緝ヲ懐より。御衣の袖てとり出と。上ニ血字ありけるニ司馬師兄弟共持大推將圖篡逆所行詔制皆非朕意望各部官兵將士同仗忠義討滅無端匡扶社稷天下幸甚

司馬師お見てそゝさ歯て切り。元来汝ホヲヲ三族を滅ださんと謀る。我忠義のんてりけるニ武士ども篏さ推出ーけれ市ニ出ーさ首て切と。下知をるニ人音あげさ。罵りけるニ市ニ到るべき李豊夏侯玄ハ路さゞら大音ニ呼び罵りてるとたい歯てとぐさ打落され口中糊て含ざ叫び罵りて

斬るけるその後大勢を遣はして三族を平げて家財尽く御林の軍と分ち施す。魏主曹芳が事のあらんれるをもあらば張皇后と相對はして議をる。張皇后后ぐで内庭へ耳目多ければ君との事もるとたゝ妥いろある憂目よろあひんとひけるを司馬師叙を帯く宮中へ入けるに張皇后おどろひて地へ倒れ司馬師目を怒らし曹芳を睨んでけるに臣が父陛下を輔く君と仗其忠周公の下へ出だ。臣又陛下へ事さ。伊尹とあんで異あらん然るに恩をあめて讐とへ功をあめて過とへ臣を王莽董卓が輩と一のもの知何ある史ぞ曹芳が曰く朕争さ乱てあらん司馬師懐ず。御衣の袖をとり出へ地へそとに投打さるゝ

い誰人の書たるぞといひけるに曹芳おどろき怕れ魂天外へとび顔土の色のごく。震ひ戦ひてやけるに是もと朕が本心よあらず他人のおひて成しむるもの。司馬師が曰くみづから成し七女へ罪を他人へ譲る此いろある刑を用ゆべき曹芳黙然とへく苔ざりけるに司馬師再三責問へ曹芳ひざまづいて告さく曰く。その罪よとよ迩れがこゝとやせども大将軍幸ひに宥せ。司馬師あざ笑ひて曰く。陛下まづ起ち国法いまだ廃べらず曹芳が曰く。三人のいくさある。我市へ出へく已へ三族を滅おせりとく。張皇后さしくやけるに此女張緝が子ろう。生さくい争う置べき早く引出せと下知をあるに曹芳大へ哭さく。司馬師が袖へとり

司馬師
張皇后

曹芳
司馬師
天子をのぞみ
皇后を弑さ

付けよべ司馬師袖を拂ひて外に出で其の輩をして害せん
とせば安んぞ寧ろ毒あきに大丈夫にあらざるとて。
高らかに云放ち。張皇后を東華門に幽し。鴆毒をもり
てしめ殺し曹芳なきの由を告げしめ。哭して已ざ
りけり是乃ち曹操が。あやまりに漢の獻帝を脳し奉りし伏
皇后を殺したる報ひ子孫ながもよびけるとぞ覚えし。百官をあつめ令主上甚だ幼沖
にして道なく娼優をあそび近付。奸譎を親を用ひ罪の甚き古
の昌邑王にもとぎたり。我謹んで新君を立て社稷を保ち。天下の太平を謀らんとありと人
いでおもひのままと云けよべ群臣をあざむきて曰く。大將軍聖賢の
道を行ひ給ふ是天に應ずる順ひなり。誰か命に背くべき司馬
師大に喜び百官を伴ひて永寧宮に到り。郭太后に右の
趣きを告けよべ郭太后やがて即ち令司馬師が曰く。彭城王曹據が聰明仁孝にして天
子の徳あり。郭太后やがて彭城王にせ為に叔ちう今是
と天子とせべ我いうある礼をもて當るべき。今思ふに高貴
鄉公曹髦は文皇帝の孫。温恭にして克讓る此人を君と
せん尚書令司馬孚が曰く。太后の詔まことに志ろし急ぎ使を
もせて招きの人司馬師大に志ろび元城へ使を遣し
て。高貴鄉公をよび給へ。郭太后と太極殿に請じ曹芳を
よんで責て曰く。汝荒淫にして天下を治るの智はなく

傳國の璽と解く。斉王の爵を回り再び都へ入るてあれと云けるに曹芳涙をおさへて。
あるの。五六人を送けるが翌日高貴卿公上りのよと告ければ百官悉く驚き高貴卿公名ハ髦字ハ彦士とあなち曹丕が孫ぬ〜く東海定王霖が子ありて百官みな南掖門の外ぬ出て再拝しく迎けるに曹髦きうぬ答礼大尉王粛ぬ〜ふくと言ければ曹髦が曰く。我も亦人臣ぬ太后詔〜くぬ称きの〜其故をもらぶとく輦を進ぬ〜ども乗ずて駕ぬ徒歩〜て大極殿ぬ上りけるに司馬師扶起〜く郭太后ぬ入へ〜む郭太后よろこんでやけるに我汝が幼少よりの帝王の相あるときゝ。

果〜て此のく〜汝天下ぬ君とし〜てよく恭倹ぬ〜て用を節〜仁徳を施〜く。先帝を辱しめる辞〜けれども。司馬師文武の百官とありめく即位の大礼をとくの〜嘉平六年を正元と改めさ。天下ぬ大赦を行ぬ是より権柄尽く司馬師ぬ帰す。孫憚ともく黄鉞を執く出入〜朝ぬハく趨らぶく事を奏さるぬ名を云ず。劍を帯さ殿ぬ昇る。ろ〜くの文官武将その威を怕れべとのみまし。

繪本通俗三國志七編卷之八終